

平成 21 年度 第 3 回大学授業研究会の報告

平成 21 年度第 3 回大学授業研究会は、11 月 4 日（水）の合同教授会終了後、MM 館メディアホールにおいて開催された。始めに FD 推進委員会の高橋享子副委員長から挨拶があり、「私語のない、双方向の授業の創造的探究」を目的とした本研究会の主旨を確認した。

今回の参加者は、約 50 名と前回より少なかった。司会進行は、FD 推進委員の今城道子委員（音楽）が担当した。

まず各学科からご推薦いただいた 3 名の先生方に発表していただき、その後、約 30 分間での質疑応答となった。発表は、以下の通り。

- (報告①) 音楽・永島茜先生「私語がない双方向の授業の実施例」
(報告②) 健康スポーツ・松本裕史先生「活気のある授業を目指す実践例」
(報告③) 食物・林宏一先生「私語がない双方向の授業の実施例」

出席されていた先生の数が少なかったこともあり少し質疑応答も少なめ（報告④）だったが、松本先生（健康スポーツ）の小道具を用いた授業活性化にかなりの注目が集まり、また林先生（食物）のグループ単位の発表にも多くの関心が寄せられた。音楽の永島先生は発表のあと、退席されたので具体的な質問ができなかった。



アンケート結果を見ても「総じて好評」であり、今後この研究会をより発展させてほしいという積極的な意見や、授業風景を見たい等、具体的な希望も書かれていた。

また、林先生のプレゼンテーションに関しての質問と思われる、a「私語はないが黙っていて授業に参加していない学生に対しては、どのように対応すればいいか」、b「プレゼンテーションの内容（例：工夫等）が、かなり重複したものとなってきたように思う」とのコメントもあり、この点については今後の課題の一つと考えられる。

合同教授会后、プレゼンテーションに引き続き質疑応答に入り、先生方にはかなりお疲れだったと思いますが、教職員の皆様のご協力により無事に終了させて頂くことができた。

報告①テーマ「活気のある授業を目指す実践例」

- a 実施者：永島 茜 講師（音楽学部、応用音楽学科）
 - b. 科目名：「環境と音楽」
 - c. 対 象：応用音楽学科 1 年（受講者数：16 名）
 - d. 科目目標：音楽と音楽がおかれる環境に関して多角的に学ぶ。
- cf. 応用音楽学科の目標と学生への期待*

■授業構成

基礎から応用に発展できるよう、グループ学習や発表なども取り入れる。基礎では、芸術音楽分野における基礎知識を体系的に学ぶ。併せて、社会と音楽の関わり方の事例を検討することにより、自らへの応用可能性を模索する。

■取組例；信頼関係の構築を助けるいくつかの試みとその意味

- 最初に「私語」は他者の権利侵害であることを説示
- 出席確認はフルネームで（同時に変化が認められる学生への声かけ）
- 学生は名前で呼ぶ（親近感を創出）
- 頻繁な質問（時々「余興」も加える）
- 私語する傾向にある学生を活用（発言すること、間違えることの恐怖感軽減に貢献）
- アンケートや授業の写真などを公開する（自らのことには興味がある）
- 最後列の着席不可や座席移動（時に威嚇も必要）
- ノートやプリントの見回り（緊張感）
- グループ発表は、誰がどこを担当したのかを明確にさせる（集団における責任所在）
- 課題等は学生に選択させる

■今後の課題

- 後期はやや緩んでいる
- 受講者数が多い場合は対応できない
- 私語注意に対する受講者の意見（肯定的／否定的捉え方が拮抗している）
- 知識を丸暗記するよりも、学生自身の言葉で語れるように誘導できる問い方の検討

報告② テーマ「活気のある授業を目指す実践例」

- a. 実施者：松本 裕史 講師（健康・スポーツ科学科）
- b. 科目名：健康科学総論
- c. 対 象：大学・短大1年（必修）
- d. 留意事項：今回の発表にあたり、赤岡先生のFDコラムからヒントを得て自分の目指す授業として“活気のある授業”に着目して報告する。

健康科学総論の概要

担当コマ数 計3コマ（大学2クラス、短大1クラス）

受講学生数 大学：1クラス100～120名程度／短大：1クラス90名程度

内容 健康に関する知識を幅広く学ぶ

今後4年間健康科学を学んで行く羅針盤という位置づけで実施

1. <活気のある授業>の私的定義

- ①学生が前のめりで受講
- ②問いかけに対して自然に意見が出る
- ③笑顔で授業を待つ・・・以下のような授業を目指している。

- ◆ 過去の改善前の授業では心理福祉学科の井上先生が指摘されたとおりの効果的でない注意の仕方をしていた。指導者、学生共に不機嫌になる授業であった。
- ◆ 双方に距離があり、学生は義務的に受講し、終わったあと疲れを感じる活気がない授業を繰り返していた。
- ◆ 当時は学生にその原因の多くがあると考えていたが、自分自身の授業にその原因があると考え直し、<活気のある授業>を目指し工夫を加えることにした。

2. <活気のある授業>のために心掛けていること

1) 「メリハリのある授業」をする

- ◆ 時間通りに始める

当たり前のことだが、開始時間の「ハイ、時間になりましたので授業を始めます」の一言で学生、指導者双方に気持ちの切り替えと授業に対する心構えが出来、態度が変わる。

＊ それまでは「じゃ、授業を始めるぞ」等と発言。

- ◆ 開始時に姿勢を正して挨拶（斉藤 孝 著『呼吸入門』より）を実践

「授業を始める前に挨拶します」

「はい、姿勢を正して」

「礼」「よろしくお願いします」

・・・・・・・授業を始める。授業に入る前に机上の片付けも指示。

＊ 姿勢を正すことにより腰を定められ、上半身が安定し疲れにくいという効果がある。

＊ 授業前に机上を片付けることにより、授業に向かう気持ちができ、注意の回数が減る

- ◆ 今日の内容（ポイント）を示す。

どこまでやるのかを提示し見通しを持たせる。90分の道のりを示して学生に集中力を

もたせ、メリハリができる。

2) 「集中できる」授業をする

◆座席指定は私語をなくすために重要

○座席指定をすることで教壇に集中させる

○指定は順番ではなく、前の席を希望する学生のために前方 2 列は空けて自由席とし、希望する学生に選択させる。

(1 回目は指定された席で、2 回目は前方 2 列への移動を認め、3 回目より固定)

◆書き込み式プリントの活用

○授業に対して聞いていても解らないと思い込んでいる学生が存在する。そのような授業のポイントを掴めない学生のためにどこが大切なかを提示し、ちゃんと聞いておこうとさせる。

○プリントの空欄を残さず、全部埋めるようにさせる。…埋めたくなる心理⇒聞き逃さない。

◆学生の名前を憶える

○匿名性を解消し、緊張感を持たせる

○褒めるとき、注意するときそれぞれに名前を呼ぶ＝名前はこっそり憶えるようにしている。試験時の MIC 確認作業時に顔と名前を憶えるよう努力。

3) 上機嫌で授業する

○指導者自身が上機嫌で授業することが最も大切。これにより学生も上機嫌にする。

◆毎回授業では前回の確認テスト(10 分程度の復習問題＝穴抜き方式)を実施。

○テスト中に机間巡視しながら、「誰ができるかな？さあ、やってみよう」と言いながら緊張をほぐす小道具を使用し学生を当てて回答(発言)を促す。(小道具の使用は学生にかなり好評)⇒アイスブレイク

◆最初に机間巡視

○最初の指示にもかかわらず、授業に関係のないもの(携帯電話機が出ていることが多い)が机に出ているのでこれを片付けさせる。これをしませることで、他のことをしている学生が減るので注意をする回数が減る。

◆声を張り上げずにすむ工夫

○注意を惹くための小道具を使用

○皆で考えさせる時にざわざわしたり、話が本筋から逸れてしまった時、うるさかったりする時にはピー音を鳴らし、注意を喚起(確実に静かになり、効果抜群)、前を向かせる。

○苛立つことが少なく、メンタルユースに良い

4) 「元気が出る」授業をする

○授業をする方、受ける方、共に元気が出る工夫

◆ほめるための質問

○時折、積極的に意見が返ってくるよう簡単な質問をする。

○答えの正否にかかわらず積極的に発言したことをほめる。「○○さん、とても良い発言をしたね」

○積極的に意見を言わせる発言をする「さすが」「優秀」「天才」「すばらしい」等

⇒なんとなく嬉しい

◆学生の発言者にみんなで拍手

○「ハイ、みんなで拍手！」発言者は恥ずかしそうだけれど嬉しそう⇒何となく元気が出る

○仏頂面の先生より、笑顔の先生の話は多少聞く気になるのではないかと思い、できるだけ笑顔で授業をするようにしている。

<まとめ>

●活気のある授業には教員と学生との人間関係が重要。

●良好な関係をつくるために、また人間関係を構築するために、すれ違ったときにできるだけ声掛けをしていくことを実践している。

●この関係があれば、少しでも聞こうとする雰囲気作りに繋がる。

【注】このたび報告した実践例の多くは、中西先生（健康・スポーツ科学科）、北口先生（教育学科）からのご示唆を得て、組み立て、授業展開しているものです。

報告③ テーマ：＜私語がない双方向の授業＞の実施例

- a. 実施者：林 宏一 教授（食物栄養学科）
- b. 科目名：「公衆栄養学実習」
- c. 対 象：3年（管理栄養士国家試験受験資格必修）

(1) 科目目標

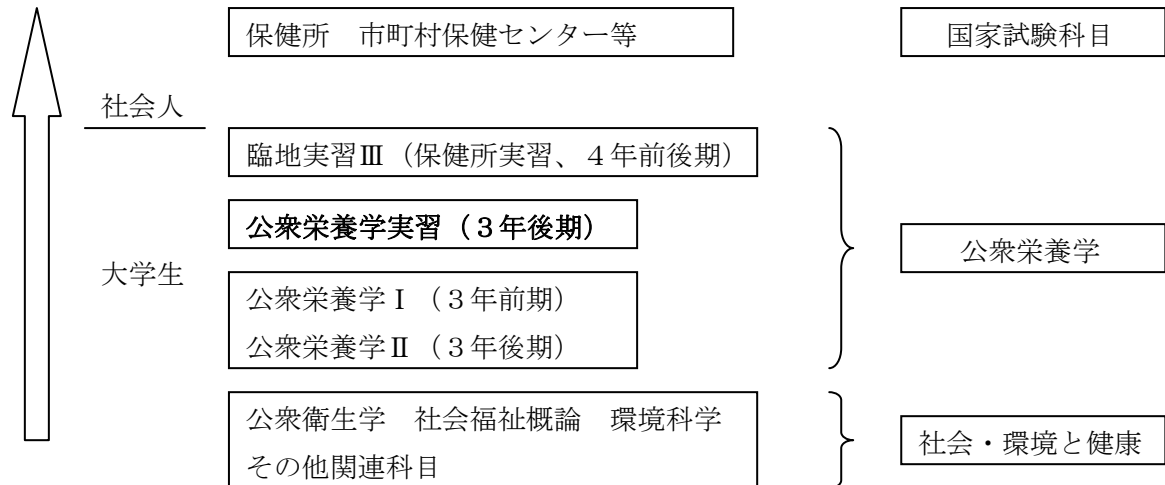
地域等の栄養問題とそれを取り巻く環境要因に関する情報を収集・分析し、総合的に評価・判定する能力を養う。また、保健・医療・福祉・介護システムの中で、人々に適切な栄養関連サービスを提供するプログラムの作成・実施・評価の総合的なマネジメントの理論と方法を習得する。

(2) 授業内容

地域、職域等集団の健康・栄養問題を把握し、適切な公衆栄養プログラムを計画・実施・モニタリングするという公衆栄養活動のためのマネジメント能力を養うため、関連する概念と理論を教授する。

紹介科目の概要

- 食物栄養学科 専門科目 管理栄養士国家試験受験資格必修
- 3年後期開講 3・4・5限(隔週開講)
- クラス別実施 1クラス 40人＋α
- 専用実習室（健康科学館）



- 上記のシラバスにしたがって行なうグループワークであり、関連科目を図示した。
- 学生は各グループで発表の準備を行い、計画にそって発表を行なう。
- 教師は、学生に文章ではなく項目（集団の持つデータを示す）を提示する。
- プレゼンテーション：1班（5～6人）が15分

質疑応答：他班の計画を評価

- 「項目が記載された評価表」に記入し、代表が班の意見を発表する。

紹介科目の特徴

- 1対1に対する答えはない。答えの技術でよい。

○教科書の内容は答えの記述ではなく、事例紹介という位置付けが多い。

その時、その時の状況に合わせて判断し、実践（展開）できる能力を身につける。

但し、出来る限り科学的根拠に基づくことが要求される。⇒ 学生はこのような授業体系に慣れていない。

<今回の事例>

○グループワークが中心の授業

いわゆる私語はない。しかし、グループワークに参加せず黙っている。

⇒ 参加していない。

⇒ 周囲の学生に少なからず影響を及ぼしている。

うるさくないだけで、私語をしているのと同じではないか。

→ 参加していない学生のいる班に私語はない。（参加するよう、机間巡視の時注意する）

一方、盛り上がっている班に近づくと、水をさすような感じになる。

報告④ プレゼンテーション後の質疑応答

Q 1 小道具を使う作戦は、どのような科目でもしているのか、また、どこで購入できるのか。

A1 100人以上の大人数の授業でのみコントロールする手段として使っている。50人程度のクラスでは名前を憶えられるし、距離も近いので小道具を使う必要はない。

使った時、学生は驚きの反応を示す。意見が出やすい。ゼミでも使うが評判はよい。

ピー音への反応は・・・だが、確実に静かになる。

これらの小道具はビジネス・セミナーで知り、面白いと思い、インターネット販売で購入した。クッシュボール 価格 ￥800ー アメリカ製 2ドル

エネジーチャイム ￥2,000ー（三連式がお奨め ￥4,500ー）

クッシュボールはガムテープと毛糸で手作りできるので買わなくても良い。

Q2 Group work での不参加学生に対する指導はされているのか。

また、どの程度の割合でそのような学生がいるのか。

A2 ○1クラス40数名で不参加学生が0名のクラスもあるが、多いクラスで3名。平均1～2名程度でそれほど多いわけではないが、一人でもいると雰囲気が変わるので気にしている。

○学生への注意は、他の学生の前ではしない⇒心を閉ざすことになるため40人に1～2名なので名前を憶えて、廊下などですれ違った時に挨拶したりして、授業では他の学生と同様に扱うように心がけている。そうすることで実習中そばに行った時、必ず教師の目を見てくれるので、笑顔でコンタクトする。最後には皆の輪の中に入る。

Q3 健康・スポーツの学生はノリがよいが、共通でも同様の効果が得られるだろうか。

A3 共通では実践していないが、「総合演習」科目(教職必修)“人間関係作りとコミュニケーション”でも使っている。健康・スポーツの学生以外に英文・教育など他学科の学生が受講していて、受けは良い。共通科目でも積極的に参加してもらえと思う。

Q4 寝ている学生がいる時、どう対応しているか。

A4 机間巡視中にトントンとして起こす。授業が60分以上経過して沈没しているときは疲れているかもしれないのでスルーする場合もある。タオルを敷いて寝ている学生には皆の前で必ず注意する。

Q5 黙っている学生は、何故黙っていると思うか。

A5 目を合わせられるようになった学生のうち何人かがゼミをとるようになって、フレンドリーになるので話を聞いた結果、“集団がもともと苦手なタイプ”と“先生が私を見ていないと捉える”学生が存在していた。前者は、真面目で勉強も良くしているが、集団が苦手で発言しない。後者は、駅や繁華街で出会った時、オウと言うことで実習参加に繋がってくる。

Q6 授業公開OKのストックが他にあるか。あれば、自分も参加して吸収したいと思う。

A6 ストックはない。中西・北口の両先生には個人的に直談判し、快諾を得て、授業に参加させてもらった。空気になるつもりで教室の後方に居させてもらい授業を見学した。いろんな

風景が見えた。何も言わず、何もせずに空気に徹して見せてもらった。

Q7 学生の名前はどんな風にして憶えるのか。何パーセント憶えているか。

A7 ○通年授業の時は 100%憶えた。6 回目くらいに中間テストを実施し、MIC を見てメモをしながら憶える努力をし、半分は憶えられる。また、授業時に当てて記憶定着を図る。
○名前を間違えることもある。名前を間違えた時は丁寧に謝り、次から憶えるようにしている。今は MIC reader 利用の授業で 30%程度、50 人クラスは点呼で出席確認し、ほぼ 100%憶える。

Q8 バックでの「調べ学習」、「参加への引っ張り」とか、繋ぎになることとしてどんなことをしているか。

A8 ○今日紹介した授業は 3 年後期開講なので、前期の前提となる講義科目で理論を学習し実習の基礎を作る。
○前期の理論では「事例紹介」を多くし、後期の説明などで「刷り込み」を図る。後期の 9, 10 月は早めに展開している。ついて来られない学生が若干存在するが、同じグループの学生が「関連する記憶を呼び起こし」発言をすることで、他の学生達も思い出したりして繋ぐことができる。
○実習時には各班に 1 台のみのコンピューターを使用させ、判らないことや確認したいことをその場でリアルタイムにインターネット検索できるようにしている。
○1 台の画面を 5~6 人で集まって見ることで議論し、互いに高め合う工夫をしている。